

## 報 告

## 患者教育学習会を受講した看護師の認識と実践の変化

聖隷浜松病院 慢性スペシャリストチーム

外来看護課

中村麻友美 山本真矢

看護部管理室

松本礼子 鈴木千佳代

Keyword：患者教育、看護師、認識の変化、看護実践

## 要 旨

患者教育は、慢性疾患患者の自己管理支援において看護師の重要な役割である。当院では2014年度より慢性疾患領域の認定・専門看護師が協働して患者教育学習会（以下；学習会）を開催している。学習会を受講した看護師の患者教育における、認識と実践の変化について報告する。受講後に看護アセスメントの認識に変化がみられたのは92%で、内容は＜変化ステージを捉える＞＜レディネスを意識する＞＜患者の背景を捉える＞＜行動変容のプロセスを考える＞であった。看護実践で変化がみられたのは88%で、記述内容から＜変化ステージに合わせる＞＜過去の体験を取り入れて指導する＞＜患者の現状を理解する＞＜患者の個別性に合わせる＞＜学習したことを意識して実践する＞のカテゴリーが抽出された。受講した看護師は、医療者が情報を伝えるだけの一方的な指導ではなく、行動変容を促すために患者を成人学習者としてとらえることの重要性を認識し、実践の変化に繋げていた。

## 緒 言

慢性疾患のある患者が病気をもちながら社会生活を送るためには自己管理が重要になる。患者が食事療法や服薬の管理など自ら治療に取り組むことを疾患の自己管理といい、その自己管理能力を高める方法を教授するのが患者教育である。患者教育の考え方は、疾病構造や時代の流れとともに、

権威的な上から下への『指導型』の教育から、当事者の自己決定、自己管理重視の『学習援助型』の教育へとパラダイムシフトしてきた<sup>1)</sup>。看護師は、疾患や治療に関する専門的な知識だけでなく、学習者である患者を生活者として捉え、学習者の経験や価値観を尊重し、活かしながら学習者の自己主導型学習を促進できるような支援を意図的に行っていくことが必要である。

当院では今までも、各職場で疾患や専門領域ごとに必要な患者教育が行なわれてきたが、患者教育を担う看護師に対し、『患者への自己管理支援』を組織的に系統立てて学習する機会はほとんどなかった。そこで2014年度より、成人に対する教育方法を理解して患者の行動変容を促し、それを維持・習慣化していくための支援を実践できる看護師の育成を目的とした患者教育学習会を開催している。学習会は、当院の慢性疾患領域の認定・専門看護師が協働して開催し、成人学習の特徴や行動変容・行動強化に関する理論について、講義やグループディスカッションを用い受講者が理解し、実践につなげることができるよう支援している。

今回、学習会に参加した看護師が、受講後に患者教育に関する認識や実践の変化について明らかにするために研究に取り組んだので報告する。

## 目 的

本研究は、学習会を受講した看護師の患者教育における認識と実践の変化の実態を明らかにすることである。

## 対象および方法

### I. 研究対象

2014年から2019年に学習会を受講した当院在籍中の看護師37名とした。

### II. データの収集方法

2020年2月から3月の間に、対象者に対して無記名自記式質問紙調査を実施した。調査項目は、対象者の属性、患者教育に関する知識や経験、および学習会受講後の看護ケアに関する患者アセスメントの際の認識と実践についてである。学習会受講後の看護ケアに関するアセスメントの際の認識と看護実践時の変化については、「全く変化しない」「あまり変化しない」「やや変化した」「変化した」の4段階のリッカート尺度とし、変化した理由を自由記載する形式とした。調査用紙の回収には、返信用の封筒を用意し、回収箱への投函とした。研究同意は調査用紙の返送をもって得られたものとした。

### III. 分析方法

データは、調査項目ごとに単純集計し、自由記述した項目については類似した内容を質的帰納的に分析した。

## 倫理的配慮

本研究は所属施設の臨床研究審査委員会の承認を得た上で実施した(承認番号:3279)。対象者には、本研究への協力は、自由意思によるものであり、本調査に協力できない場合も不利益は被らないことを文書にて説明し、調査用紙は職場長を通して配布した。本調査で収集したデータは、研究目的以外では使用せず、調査用紙は研究終了3年後にシュレッダーにて廃棄することとした。研究結果の報告に際しても、個人が特定されないように匿名性を確保した。

## 患者教育学習会の概要

学習会の対象者は当院の看護師のクリニカルラダーレベルI以上に認定されている看護師とし、患者教育I・患者教育IIの2部で構成され、(毎年

別日に)各1時間半行っている。患者教育Iの目的は、「受講者が患者教育における看護師の役割と教育方法を理解する」とした。学習会の内容は、成人学習者の特徴、患者のレディネスのアセスメント、模擬事例のグループディスカッションで構成される。患者教育IIの目的は、「受講者が患者教育で活用できる行動変容・行動強化に関する理論を学び、支援方法を理解する」とした。学習会の内容は、トランスセオリアルモデル、模擬事例のグループディスカッションで構成される。

## 結 果

学習会を受講した37名の看護師に質問紙を配布し、26名より回収(回収率67.6%)、そのうち有効回答の得られた25名を分析対象とした(有効回答率:96.2%)。看護師の経験年数の内訳は3~5年目が6名(24%)、6年目以上が19名(76%)と6年目以上が多かった。患者教育に関する知識や経験に関する質問では、所属する職場で日常的に患者教育を実施する機会があると答えた者は23名(92%)であった。その内容としては、退院支援が14名、個別の患者教育が9名、集団教育が6名であった。学生時代に患者教育や成人学習に関する講義を受けたことがある者は13名で、学習会受講前に、患者教育や成人学習に関する研修を受けたことがある者は12名であった。さらに、学生時代に講義を受講し、かつ関連する研修を受けたことのある者は9名(36%)であった。

### 1. 患者をアセスメントする際の認識の変化

学習会受講後の患者をアセスメントする際の認識は、変化した11名(44%)、やや変化した12名(48%)、あまり変化しなかった2名(8%)であった(図1)。自由記述欄より、認識の変化は、<変化ステージを捉える><レディネスを意識する><患者の背景を捉える><行動変容のプロセスを考える>の4つのカテゴリーに分類された。具体的には、<変化ステージを捉える>は、「患者がどの段階にいるのかを考える」、「患者はどの段階にいるのか考え、段階に合わせた援助を行う」等、9名が記載していた。<レディネスを意識する>については、「患者が教育を受けられる

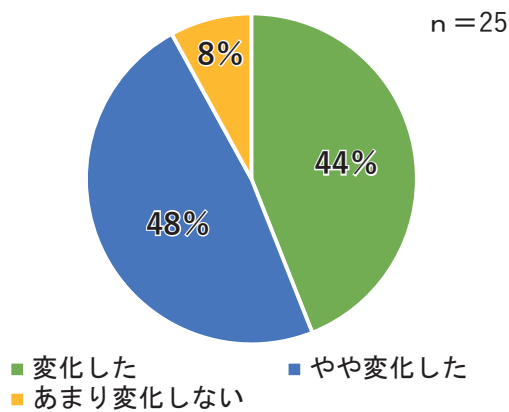


図1 学習会受講後の患者のアセスメントの際の認識の変化

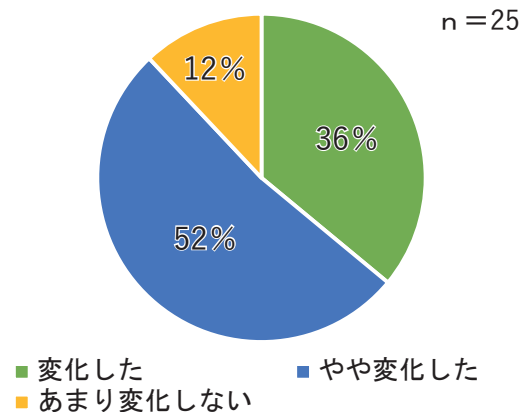


図2 学習会受講後の看護実践の変化

状態であるか考える」、「レディネスを意識して関わる」等と8名が記載していた。＜患者の背景を捉える＞は「患者の背景などを踏まえ介入する」等と4名が記載し、＜行動変容のプロセスを考える＞は「行動変容のプロセスを考えながら関わる」で2名の記載があった。

## 2. 看護実践の変化

学習会受講後の看護実践については、変化した9名(36%)、やや変化した13名(52%)、あまり変化しない3名(12%)であった(図2)。看護実践の変化について記載のあった20名の記述内容から、＜変化ステージに合わせる＞＜過去の体験を取り入れて指導する＞＜患者の現状を理解する＞＜患者の個別性に合わせる＞＜学習したことを意識して実践する＞の5つのカテゴリーが抽出された。＜変化ステージに合わせる＞では、「患者の言動や言葉がどの段階が考える」、「カンファレンスで患者がどの段階にいるか考える。それを踏まえどのように指導すればよいか検討する」があがった。＜過去の体験を取り入れて指導する＞では「経験した症状やエピソードを踏まえた指導をする」、「過去の指導や学習の経験があるのかを聞く」などがあがった。＜患者の現状を理解する＞では、「訴えの変化、指導前の様子を気にする」、「患者が指導をうける上でどのように考えているか確認する」があがった。＜患者の個別性に合わせる＞では「患者のニーズに合わせた指導」があ

がり、＜学習したことを意識して実践する＞では「押しつける指導ではなく、何ができるのか患者と考え、自主性を引き出す」などがあがっていた。

## 考 察

当院では各職場で専門領域毎に、患者教育についての学習会は開催されていたが、患者への自己管理支援を組織的に系統立てて学習する機会はほとんどなかった。河口は患者教育において、看護師は疾患や治療など教える内容については学習しているが、やる気のない患者と総称されている患者への効果的な指導方法は学んでこなかったと述べている<sup>2)</sup>。今回の受講者の92%の看護師が退院支援や個別の患者指導など日常的に患者教育を担う中堅看護師であり、そのような看護師にとって、患者をアセスメントする際の認識と看護実践の変化の結果から学習会はニーズに合っていたと考えられた。

患者教育では、自己効力理論、Prochaskaの行動変容の段階、学習準備状態などの理論を用いて、対象者の学習準備状態を把握し、これらの理論を活用していく必要がある<sup>3)</sup>。学習会では、成人学習者の特徴、患者のレディネスのアセスメント、行動変容・行動強化を促すための支援方法についての理論を学び、模擬事例のディスカッションを通して実践での活用ができるような構成にし

ている。受講者の患者をアセスメントする際の認識の変化では、＜変化ステージを捉える＞＜レディネスを意識する＞＜行動変容のプロセスを考える＞が抽出され、看護実践の変化では＜変化ステージに合わせる＞＜過去の体験を取り入れて指導する＞が抽出され、受講者は、学んだ理論を意識化し、実践に取り入れようとしていたと考えられた。

患者をアセスメントする際の認識についての変化の「患者が教育を受けられる状態であるか考える」や、看護実践の変化の「経験した症状やエピソードを踏まえた指導をする」は、受講者が患者のレディネスを意識してアセスメントし、患者を成人学習者として捉え＜過去の体験を取り入れて指導する＞ことを重視し、関わっていたことが明らかになった。受講者は、疾患や治療に関する情報を伝えるだけの一方的な知識提供型の指導ではなく、患者の行動変容を促すためには、患者を成人学習者として捉え、患者の背景や置かれた状況を踏まえて関わることの重要性を認識し、実践の変化へ繋げていたと考えられた。

小倉らは、患者指導に対する認識と実施状況について、患者の主体的参加を促す行為があまりされていないのは、指導時の「教える一教わる」ととらえられてきた歴史があり、看護職者は患者指導時に患者参加の重要性を観念的には理解しているが、意識せずに看護者主体となっていることが推察されたと述べている<sup>4)</sup>。受講者は、実践の変化において「押しつける指導ではなく、何ができるのか患者と考え、自主性を引き出す」と＜学習したことを意識して実践する＞ことを行っており、患者教育において、あくまでも主体は患者であることを理解し実践できていることがわかった。

患者をアセスメントする際の認識の変化は92%の受講者に生じていたことに比べ、看護実践の変化は88%とやや低値であった。このことは、受講者が臨床の場で、認識の変化を生じていても実践の変化に結びつけられていない、または自分自身の実践の変化を実感しにくいことが推察された。そのため、受講者が看護実践の変化を実感できるように、認定・専門看護師が実践の場で直接フィードバックを行い、受講者の実践事例を振り

返る機会を設けることが必要であると示唆された。

## 結 論

学習会受講者は、受講後に患者をアセスメントする際の認識の変化と看護実践の変化がみられ、患者教育学習会による効果が認められた。

本研究には開示すべき利益相反状態はありません。

## 引用文献

- 1) 安酸史子:なぜセルフマネジメントなのか in 安酸史子, 鈴木純恵, 吉田澄恵:ナーシング・グラフィカ 成人看護学 セルフマネジメント 第3版.(メディカ出版, 大阪, 2015) pp.14-17
- 2) 河口てる子. 心理的アプローチは糖尿病看護に何をもたらすか 看護婦の変容から患者の行動変容へ. 看護学雑誌1999; 63(4): 353-357
- 3) 河口てる子. 患者教育研究会:患者教育のための「看護実践モデル」開発の試み 看護師によるとっかかり/手がかり言動とその直感的解釈, 生活と生活者の視点, 教育の理論と方法, そしてProfessional Learning Climate. 看護研究2003;36(3):3-11
- 4) 小倉能理子, 阿部テル子他. 看護職者の患者指導に対する認識と実施状況. 日本看護研究学会誌2009;32(2):75-83

## 参考文献

- 1) 吉田亨. 健康教育の潮流:その過去・現在・未来. 保健婦雑誌1995;51(12):931-936